

# 黒川小学校における家読に関する一問一答

## (1) 伊万里市立黒川小学校の児童・職員数

児童数：153人（平成27年4月1日現在）

職員数：16名（内、市職員3名）

## (2) 家読はいつからどのようにして取り組むことになったのか

平成18年に伊万里市では「いじめなし都市宣言」が出されたが、これを受けて心の居場所としての家庭づくりへの政策要求が高まり、平成19年度からは親子の心をつなぐ「家読」のすすめ事業が実施され、当時、市内の公民館で図書室が最も充実していた黒川町がモデル地区に指定された。

指定を受けた黒川町では、公民館・幼稚園・小学校・ボランティア等による家読連絡会が発足し、黒川小学校でも地域ぐるみの連携協調のもと学校の特性を生かした家読の活動が始まった。

## (3) 家読活動を始めるとあたって地域・家庭・保護者へどのような啓発と活動に取り組んだのか

本来、地域・家庭・保護者に対する啓発活動は社会教育の分野であるが、児童の読書習慣を形成するにあたっては保護者の理解と協力が不可欠なので、育友会（PTA）を通じて関連事業を行うこととした。平成19年当時は市の肝いりで始まったとはいえ、新規の事業を性急に増やすことへの懸念から、既存事業へ家読理念による付加価値をつけることが行われた。具体的には、毎月1日のノーテレビ・ノーゲームデーに「家読」を加え、毎月の実施状況調査の原型を作った。また、従来から各学期に1回（2週間）家庭で読書に取り組んでいた「ふれあい読書週間」に（ ）付きで家読を付加し、家読の普及に努めた。また、地域に対しての啓発は公民館を中心に行われたが、特に関連のイベントが開催される際には、出演する児童への事前指導や参加奨励など積極的に関わってきた。

## (4) 各学年の取り組みはどのような特色を持たせたか

学習指導要領に基づき、低中高学年ごとに以下のような指導目標を立てている。

低学年：楽しんで読書しようとする態度を育てるため、できるだけ多く本にふれさせる。

中学年：幅広く読書しようとする態度を育てるため、図書の推薦や比べ読

みをさせる。

高学年：読書を通して、考えを深めたり広めたりしようとする態度を育てる。

また学年ごとに「おすすめの本」を紹介したり、さまざまなジャンルの本に親しませるための「ハッピーブック事業」等を実施したり、児童が楽しみながら発達段階に応じた読書ができるような企画を展開している。

(5) 効果・成果にはどのようなものがあるか

- ①一人あたり年間図書貸し出し冊数が、平成24年度は75冊だったが、平成25年度は143冊、平成26年度は168冊と伸びている。
- ②毎月行っている家読実施状況調査で、平成25年度前半は60%台だったものが、同年度の2月には91%という高い実施率をあげて以来、平成26年度は年間通じて、90%台を維持するに至っている。
- ③町の家読推進協議会主導で行っている「リレー家読」(クラス毎に1冊の絵本を回し読みして感想を共有する取組)によって、各家庭が本の感動を共有することができ、連帯感の醸成にも寄与している。
- ④学校図書館のリニューアルを行い学習コーナーのゾーニングを行ったことにより、調べ学習等の図書館利用学習が増えた。
- ⑤各種表彰を受け、児童・保護者・職員ともに読書推進への士気が上がっている。(平成26年度子ども読書活動優秀実践校文部科学大臣表彰・平成25年度佐賀県読書チャレンジ運動優秀賞)

(6) 保護者からの感想・評価はどうか

- ①リレー家読では、各保護者が感想を共有し合うことにより、親子の触れ合いの時間の意義が再確認されている。
- ②学校評価のアンケートでも、「子どもが良く本を読むようになった」との回答が多く出されていた。
- ③継続事業だけでは意欲が低下していたが、新しい取組が行われてから親子ともに活動意欲が高まった。

(7) 子どもたちの感想はどうか

感想は取っていないが、家読を親にせがむ姿や、ボランティアの読み語りに対する反応などから本好きの子供が育っていることの手ごたえを感じている。

(8) 学校は「家読」及び子ども読書活動に何を期待しているか

- ①読書習慣の形成
- ②情操の陶冶
- ③心的エネルギーの充足

(9) 読書は学力とどのような因果関係が見込めるか

- ①語彙量の増加
- ②知的好奇心が刺激されることによる脳の活性化
- ③読んだ内容を交流することによる要約力の向上

これらの期待される効果と学習活動との相関等について、平成26年度は全校上げて実証研究に取り組むこととしている。

(10) 家庭と連携・協働するための留意点は何か

- ① 意義・目的を明確にすること。
- ② 目的達成のための計画を具体的に示すこと。
- ③ 役割分担を行い、学校・家庭相互に応分の責任を負担すること。
- ④ 1年間で一定の結果・成果を出すこと。

(11) 読書指導を家庭と連携することによる効果は何か

- ① 学校職員や行政の担当者が異動で替わっても継続できること。
- ② 自立した読書生活者の育成につながること。
- ③ 学校と家庭の信頼関係強化による相乗効果が期待されること。
- ④ 家庭での習慣が正の連鎖となって次世代に続くこと。
- ⑤ 日常生活を通して読書習慣が形成されやすいこと。

(11) 今後の目標と計画はどのようなものか

- ①読書指導の教育的効果について実証的な研究を行う。
- ②学校教育と社会教育の互恵的な事業としての「家読」を企画し実施する。

(12) 他の学校や地域へ「家読」をすすめるメッセージ

- ①毎年同じことをやっていると、マンネリズムに堕してしまう。不断に新しい仕掛けを企画実施するとともに、**今日的な意義の見直し**を随時おこなう必要がある。
- ②学校図書館や学級文庫等の物理的な環境を整備・充実することも重要。単なる環境改善の効果だけでなく、関係者の関心や意欲を高める効果も期待できる。